

博士論文最終結果報告書

看護学研究科	学籍番号 氏名	206103 立木 歌織
論文題目 後期早産（妊娠 34 週～37 週未満）児を出産した母親の産後 3～4 か月頃までの育児のニーズ		

審査委員

区分	職名	氏名
委員長	教授	大澤 真奈美
委員	教授	山下 暢子
委員	教授	松田 安弘

論文の要旨

本研究は、後期早産（妊娠 34 週～37 週未満）児を出産した母親が、出生直後から産後 3～4 か月頃までの育児過程において看護職に求める育児ニーズを明らかにし、児の成長発達に応じた支援の介入時期および支援内容を検討することを目的とした質的研究である。

近年、後期早産児の出生数は少なくないものの、その母親に対する支援は正期産児を前提としたものが多く、退院後の育児支援に関する知見は十分ではない。そこで本研究では、後期早産児を育てる母親を対象に半構成的面接を実施し、SCAT を用いて分析を行った。

分析の結果、後期早産児を育てる母親は、出生直後から産後 3～4 か月頃までの育児過程において様々な育児上の不安や困難を経験しており、それらに関連した看護職への育児ニーズが明らかとなった。また、育児ニーズは育児の経過に伴って変化しており、児の成長発達に応じた支援内容や支援の介入時期について検討された。

本研究は、後期早産児を育てる母親への看護支援を時期別に整理し、医療機関から地域への支援移行を含めた継続支援の在り方に具体的示唆を与えるものであり、周産期看護および地域母子保健活動の発展に寄与する研究として評価できる。

論文審査の要旨

審査委員会は、本論文について予備審査、個別審査および最終審査を実施した。審査においては、研究課題の設定の妥当性、後期早産児を育てる母親の育児ニーズという概念の明確性、質的研究としての分析過程の妥当性、ならびに研究目的、結果および考察の一貫性を中心に検討を行った。

予備審査では、後期早産児を育てる母親に焦点を当て、医療機関退院後から地域での育児が本格化する時期の支援ニーズを明らかにしようとした研究視点について評価された。一方で、育児ニーズの概念の位置づけや分析過程の記述、分析結果と考察との対応関係について、より明確な説明が求められた。

その後の個別審査においては、育児ニーズの定義が整理されるとともに、分析結果が研究目的に沿って体系的に示されていること、また分析結果から考察へ至る論理的なつながりがより明確になっていることが確認された。さらに、質的研究としての分析の妥当性や結果の解釈についても適切に説明されており、論文全体の完成度が高められていることが認められた。

最終審査においては、研究の背景、目的、方法、結果および考察について論理的かつ明瞭な発表がなされた。質疑応答では、研究方法の選択理由、分析過程における解釈の妥当性、研究成果の実践への活用可能性等について質問がなされたが、研究者は研究内容を十分に理解した上で適切に回答した。また、本研究が後期早産児を育てる母親への継続的な看護支援の充実に向けた基礎的知見を提供するものであることが確認された。

これらの発表および質疑応答を通して、申請者は本学博士後期課程のディプロマ・ポリシーである DP4「看護学を専攻する看護専門職として必要な高い倫理的思考力をもち、真理を探究し続ける」および DP5「革新され続ける看護学の充実・発展に向けた研究の推進に意義を見出す」を満たしていると判断した。

以上の審査結果から、本論文は博士論文として求められる学術的水準に達していると判断され、博士（看護学）の学位論文として適切であると認められた。